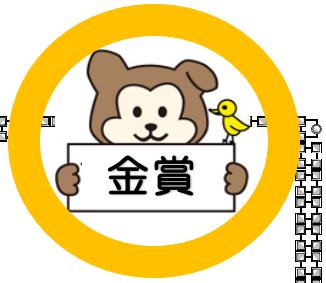

「隣のアボリジニ」を読んで

渋谷教育学園　渋谷中学校一年　鈴木　杜菜

私は、小学生の頃から上橋菜穂子さんの本が好きで、何冊も夢中になって読みました。精霊の守人シリーズ、獣の奏者シリーズ、鹿の王などです。これらの本の魅力は、ハラハラドキドキするような展開、登場人物のかっこよさなどもありますが、他の作家さんのファンタジーと比べても、圧倒的に作りこまれた物語の世界観の深さだと思います。上橋さんは、どうして自分の頭の中のみに存在している世界を、ここまで質感のあるリアリティをもって読者の私たちに届けることができるのだろう？と私は尊敬すると同時に不思議に思っていました。ある時、上橋さんが作家であると同時に文化人類学者でもあることを知り、なるほどと思いました。上橋さんは大学院生のとき、オーストラリアの地方都市でアボリジニの研究をするための小学校の先生として赴任しています。この時の経験が物語の原点なのではないかと思い、私はこの本を読んでみることにしました。

この本は、上橋さんがオーストラリアで時間をかけてアボリジニの社会にとけこんでいき、そこで心を開いてくれたアボリジニの友人たちからの聞き取り調査をまとめた内容となっています。上橋さんが本の冒頭でも述べている、「自然環境を破壊することなく、自然と共に生きてきた野生の知性を持つ人々」といったアボリジニへの先入観にとらわれることなな

く、本当にまさにすぐそこ、「隣」に存在してる人々として描かれています。

上橋さんがオーストラリアにいた頃、すでにアボリジニの人々は差別から解放されつつあり、貧しくとも白人とそう違わない生活を送るようになっています。そういった人々とご近所づきあいを通して親しくなり、話してもらえた本音。それは、アボリジニの側からのみの意見かもしれないけれど、アボリジニの人々が本当に思っていることなのだと思います。

先祖代々暮らしていた土地に、白人がふみこんできて、武力をもっておいやられ、文化を破壊される。アボリジニ的であることは悪とされ、白人文化への同化を強要される。そんな歴史を経て、今はオーストラリア政府の多文化政策のもと生活保護などを受け守られているけれども、どこか白人とは違う雰囲気をまとい、「大家族」で「酒飲み」で「よく騒ぎ」、「白人より犯罪率が高く」「仕事熱心ではない」人々。本文にあった、オーストラリア人の若者の「迫害をしたのは昔の白人、迫害を受けたのは昔のアボリジニの人々であり、現代の自分たちはいつまでこの構図を引継ぎ続けなければいけないのか？被害者の立場にい続けるのは甘えだ。」といった厳しい意見も、今の日本と東アジアの国との関係に似た部分があり、全否定することができないようにも思います。

また、アボリジニとはいっても、彼らの中にも多数の部族が存在し、異なる部族同士や白人との混血も進んでいます。たとえ同じ部族のアボリジニだとしても、伝統的な文化を守ろうとする者と、現在の白人的生活を送ろうとする者でも意見の対立はあります。本文にも、伝統的なしきたりから抜け

ようとしている人たちが出てきます。私たちは伝統的イコール善、近代文明イコール伝統と自然を壊し、冷たい悪いもの、というイメージがありますが、全てがそうではなく、アボリジニの文化ではイスラムなどでもある児童婚などの悪しき風習があったそうです。白人の自由な文化になじんだ若い人々が、厳しいアボリジニの掟に従うかというと、なかなか難しいのだと思います。。

私がこの本を読んで感じたことはたくさんありますが、まず一番目に思ったのは、異なる価値観を持つ者同士が、分けへだてられることなく、「お隣同士」でうまくやっていくのは、とても大変だということです。良いと思うことが違うのだから。これは外国人が増えている今の日本にも同じことが言えると思います。お互いを理解すること、思いやること、許すこと。そういったことが、必要とされているのではないか。

また、上橋さんのように先入観を持たず、どちらにも肩入れしない、文化人類学者のような冷静な視点を持つことも大切だなと思います。それによってお互いに誤解をしなくなるのではないでしょうか。どんな民族であっても、いい人もいれば悪い人もいる。よく考えれば当たり前のことなのに、私たちは忘れがちです。

私は中学3年生の春に、学校の行事で二週間ほどオーストラリアに行く予定です。この本で読んだことを肌で感じとれるのではないかと楽しみです。それまでに、もっとオーストラリアやアボリジニに関する本を読んでみたくなりました。

「人権を見つめ直す時」

上原中学校　二年一組　　河野　琳

〝ローザは、とても誠実でしずかな人でした。でも心のなかには強さをひめていました。そのローザが、「ノー」と言ったことで社会ぜんたいがかわっていったのです。〟

僕は、これまでローザ・パークスという女性の名前を聞いたことはなかった。この本を手にしたのは、この短い文章に引き込まれたからだ。静かな人、心の中には強さを秘め、社会全体が変わっていく。何か不思議なものを感じた。静かな人が社会を変えていけるのだろうか。ローザ・パークスはどのような女性でどのような強さを秘めていたのか、皆さんに伝えたい。

ローザ・パークスはアメリカで「公民権運動の母」と呼ばれた活動家である。たった一人の女性の勇気ある行動が歴史を動かしたとして、世界中の歴史の教科書に名を残し、その功績は多くの人々に讃えられている。ローザはアフリカ系アメリカ人で大工の父と、教師の母の間に生れた。一九三二年黒人の理容師のレイモンド・パークスと結婚。当時アメリカ南部諸州では「ジム・クロウ法」と呼ばれる人種分離法が施行されていて、公共交通機関を除く日常生活のあらゆる所で白人と黒人は隔離されていた。そのような状況の下で事件は起こった。四二歳だったローザは百貨店で仕事を終えて帰宅するため市営バスに乗車していた。バス内は白人席と黒人席に分けられていて中間の一列の席には白人も黒人も座って良い事になっていた。ローザは黒人席が一杯だったので中間席

に座っているとやがて白人が次々と乗車してきた。運転手は中間の席に座っている黒人たちに立つように命じた。ローザを含む黒人四名中三名は席を空けて立ったが、ローザは立たなかった。運転手が彼女の所へ来て席を譲るよう求めたが、ローザは「立つ必要を感じません」と答えて起立を拒んだ。「立たないのなら警察を呼んで逮捕させるぞ」と言われたが、「どうぞ、そうなさい」と落ち着いた態度で答えた。やって来た警官はこう尋ねた。「席を立つつもりでいたのだろう？」ローザは答えた。「ノー」と。

この時、一八六二年のリンカーンによる、「奴隷解放宣言」から百年あまりの年月が経っていた。しかし、人種差別は根強く残っている。そもそも、なぜ「奴隷解放宣言」が出された後も黒人は差別され続けなければならないのだろうか。本の中でローザも黒人たちが不平等な扱いを受けることに疲れていた、そんな社会にうんざりしていたと、述べている。なぜ肌の色が違うだけで同じ人間として扱われないのだろうか。同じ人間なのに。もし僕が、ローザのように差別を受けていたら耐えられないと思う。僕だけが皆と同じ机を使えなかったりしたら僕は学校へは行かないだろうし、我慢できなくて生きる希望も無いだろう。今でも白人警官による黒人への暴力をニュースで目にすると、差別は無くなっていないのだと僕の胸が痛くなる。白人が黒人より優位に立つ権利はないと思う。当たり前のように白人と黒人が共生できる社会を最優先に求めるべきだと僕は思う。人は生まれながらにして皆平等なのだから。

バス・ボイコット運動。誠実で静かなローザが「ノー」と

言ったことで、不平等を感じていた黒人の人々の心を動かしバスに乗る事をボイコットした。キング牧師が中心となり判決が出るまで三八一日もの間、すべての黒人はバスに乗らずに歩き続けた。そして皆で力を合わせた事が、バスの席を人種によって分けることは違法だという判決に繋がったのだ。

ローザは誰よりも一所懸命に仕事をする人で、家族が喜ぶ食事を考えながらバスに乗っているような優しい人だった。でも、常に心の中では差別をなくすために勇敢に立ち上がった人のこと、黒人差別によって暴力を受けた人のことを考えていた。黒人がこのような生活を強いられていることは間違っていると、誰よりも強く思っていた。優しいのと同時に強い意志を持っていたローザ。「あなただから皆が立ち上がったのです。」僕はそう伝えたい。「そして命を懸けて戦ったあなたを想って素晴らしい本が生まれました。」この本はローザを想う二人の作者の有志が大切に作り上げた本だと僕は思う。ローザの持つ強い意志に呼応するかのようにその身体から光を発光する絵や立体感のある切り絵が当時の零囲気をより強いメッセージとして僕につたえてくれる。まるでその場にいるかのような雰囲気を感じることができた。

「ローザ、あなたに出会えて日々、大切に生きることを学びました。僕も今できることにしっかりと取り組み、家族や友達のことを想い、救うべき人を救えるようになりたいと思います。そしていつもあなたを思い出して自分の道を強い意志を持って生きていきます。」

「おとなになれなかった弟たちに…」を読んで

上原中学校　三年二組　　南　るん

図書館でこの本がぱっと目に留まりました。私は中学一年の国語の教科書でこのお話を一度学習していました。ぱらぱらっとめくると教科書にはなかった挿絵がいくつもあり絵本のようで、教科書とは違った雰囲気でした。絵本というと子供っぽい明るいイメージが湧きますが、この本の挿絵は、何か重たく心をつかんで離さないといったそういう絵でした。私はとりつかれたようにその場で一気に読んでしまいました。

教科書にはなかった「あとがき」がありました。同じ作者の「多毛留」というお話も一緒に収められて一つの本になっていました。私は本を借りて帰り、家でじっくり二話とも、もう一度読んでみました。そして教科書と見比べてみました。

「母に―」から始まり、途中の挿絵の数々、「あとがき」で終わり、その後の「多毛留」というお話。すべて合わせて初めて、教科書とは別の、一冊の本として成立しているように感じました。

主人公の弟、ヒロユキは挿絵の様子から、生まれた頃は、ふっくらしていたのでしょう。後に栄養失調で亡くなってしまうのですが、生きている間のヒロユキの表情や感情はこのお話では描かれていません。ヒロユキが生きていたことは、ヒロユキの亡骸にたかるハエと、棺に膝を折り曲げなければ入らないほどにいつの間にか成長していた部分からのみ伝わってきました。

お話は太平洋戦争の真っ最中から、ヒロユキが死んで数日

後に迎える終戦までが淡々とした調子でつづられています。よく戦争のお話だと、悲しくて涙が止まらなくなったりするのですが、このお話はそういう感じではありませんでした。ただ、とても考えさせられてしまいました。モヤモヤしたようなもどかしいようなしっくりいかないような、何とも言い表せないような複雑な感情や多少の違和感がはっきりと存在し、そんな感情からか、つい何度も読み返してしまいました。

私がモヤモヤしたような感じを覚えたことのひとつに、「色」があります。淡々とした文章と白黒の挿絵、ある意味、無機質なお話の中に、なぜか鮮やかな色の欠片を感じるのです。悲しいお話で、防空壕や病室や死など、暗いイメージが多く出てくるのに、まぶたを閉じるとなぜか色鮮やかな景色の部分ばかりが浮かんでくるのです。特にB29の機体が青空にキラッキラッと美しく輝いていた部分が鮮明に浮かびます。病院で亡くなった弟を家に連れ帰っている時に見た景色にもかかわらず、悲しさや辛さは全く感じさせず、どこか現実離れしていて、遠くから自分たちを眺めているような、そんな不思議で鮮やかな景色に感じられました。

他に、私がしっくりいかなかった点に、主人公が、かわいくてしかたがなかったヒロユキのミルクを、悪いとわかっていながらも何回もぬすみ飲みしてしまう部分があります。いくらお腹が空いているからといって、自分が満たされるためにミルクしか飲めないヒロユキの命を削ってまでぬすみ飲むなんて、私には理解できませんでした。私がそれを理解できないのは、本当の「飢え」を経験したことがないからかもしれません。戦争は人の理解を超えたところにあり、命を奪い、

街を壊すだけでなく、人の心をも壊してしまうのでしょう。
ヒロユキが死んだのは主人公がミルクを奪ったせいではなく、弱者から飢えて死ぬとういう戦争の一番の被害者になってしまったからだと、主人公もお母さんも考えていたのかなと思えてきました。
弟の死を遠くから眺めているような一種の逃避感。「ぼくはひもじかったことと、弟の死は一生忘れません。」という主人公の最後の言葉。冒頭の「母に―」という言葉。戦争が引き起こした複雑な感情の辛い一面を見たようで、何とも言えない気持ちになりました。
先々月、私は修学旅行で広島に行きました。そこで被爆者の方のお話を聞く機会がありました。水辺に横たわる死体の数々、ただれた皮膚、空の色、その方の目に映った景色を、思い出すのも辛いでしょうにお話しくださいました。私は、戦争のむごさに動揺し、お話が脳裏から離れませんでした。そして、当たり前のように暮らしているこの平和な毎日がどれほどかけがえのないものかに改めて気づきました。
この本に触れ、広島を訪れたこの夏は戦争について多くのことを考えさせられました。私がこの夏を思い出すとき、白黒の挿絵や被爆者のお話から浮かんできた多くの色とともに今回抱いた何とも言えない感情が蘇ってきそうです。何かに重たくつかまれたこの心は戦争の悲惨さを忘れないためにもあえて解き放さずにそのままでいようか、そんな複雑な感情をもどかしさとともに余韻として残す本でした。